

## 主イエスのご降誕、おめでとうございます！

イエスの降誕について書かれているのは、マタイとルカであるが、この二人の書き方がまったく異なるのが気になる。ルカは手放しでこの「大きな喜びを告げ知らせている」のにたいして、マタイは「ヨゼフがマリアを離縁しようと考えていたこと」や、その後のヘロデ王による幼児虐殺事件、さらにエジプトへの避難など、不条理の連続の中での出来事なのである。これは何を意味しているのか考え続けている。（土屋至 SIGNIS JAPAN 会長）



## SIGNIS ASIA ASSEMBLY 2025 (フィリピン大会) 参加後記

### 東京大会の直後のSAA

2025年10月21日から25日まで、シグニスアジア会議フィリピン大会が、マニラ・プリンスホテル（マニラ）、セントポール・リニューアル・センター（タガイタイ）で行われた。大会のテーマは、「希望のささやき—平和を伝え、未来を築く」。SIGNISに連なるアジア11カ国から約75人のメディア関係者が参加した。日本からは、SIGNIS JAPANの代表として私一人が参加する機会を与えられ、全日程に参加した。（写真 大聖堂にての開会ミサ）



### マニラ編 「教会は最後の砦」

21日は、午前に会議受付があり、午後にはバスでマニラ大聖堂に移動して、開会ミサが行われた。教区長のカルメル・アラダ神父が主司式した。マニラ大聖堂は、戦後、日本からの献金を受けて再建・修復されたとのことだった。22日には、開会の辞で、SIGNIS ASIA会長のスタンレー・コージチラ博士が開会を宣言し、各国の参加者の貢献を称え、SIGNISの活動の更なる継続を奨励した。基調講演は、マルセリーノ・アントニオ・マラリットJr.司教が「キリストの優しい希望をわかちあう—平和の橋を築く」というテーマで行った。マラリット司教は、AI（人工知能）を新産業革命と表現し、AIを福音宣教においてポジティブに活用する必要性を説いた。つづいて、セッション1、2「リスニング・ポスト—会話から合意へ」が行われた。セッション1では、「2030年には、アジアのカトリックメディアはどのようにになっているか？」という問い合わせられ、皆で話し合った。AIやSNSを使うこと、心に手をさしのべる姿勢を忘れないこと、ユーモアを活用すること、などといった意見が出た。日本だけでなく、カトリック宣教の未来に関してはどこの国も危機感を持っているようだった。セッション2では、「メディアとは関係を作ること」であることが確認され、シグニス・バングラデシュ会長のオーガスティン・ブルブル・レベイロ神父は、メディア人が「地の塩」（マタイ5:13）になるために召されていることを再確認した。午後は、マニラ体験としてバスツアーがあり、聖トマス大学、キアポ教会、TVマリアを見学した。市の中心部にあるキアポ教会は「貧者の教会」と呼ばれ、貧しい人々が駆け込んだ教会として知られる。（写真右上）そこには「教会は最後の砦」という言葉があり心に残った。その後、次の会場であるタガイタイに移動した。



### タガイタイ編 「福音は飢えたる者、声なき声の者ために」

23日には、セッション3「人間という図書館—生きた物語との対話」、セッション4「注目から行動へ—デジタル経済社会において希望を伝える」、セッション5「預言的な声—分断化した世界に希望の地平を築く」、セッション6「机上討論—原則から実践へ」が行われた。セッション4では、カトリックメディアが「平和のためのメディア」であることが強調され、この試練の中にある世界では特に重要なことが確認された。セッション6では、グループに分かれディスカッションが行われ、私は8人ほどのジャーナリズムのグループに入った。グループでは「カトリック・ジャーナリズムとは何か？」ということを話し合い、カトリック・ジャーナリズムが、貧しい人のため、平和のため、福音の意義を宣べ伝えるため、正義をうかがうためにあることを確認し、皆で共有し発表した。

24日には、セッション7「60秒での希望のささやき—メディア・スプリント」では、実際に生成AIを使った福音宣教のための音楽や画像、動画の作成を行った。その後、大会の公式声明が発表された。午後からは、タガイタイ・ラグナツアーとして、タアル湖、SVDファームを訪ね、隠者聖パウロ大聖堂（サンバブロ教区カテドラル）でミサが行われた。マラリット司教が主司式した。翌25日に大会は閉会した。

海外でのSIGNIS ASIA大会への参加は、2023年のタイについて二回目であった。今回、私にとってははじめてのフィリピンであり、アジアを代表するカトリック国ということもあり、ずっと前から参加を楽しみにしていた。キリスト教大名・高山右近が没した国もある。SIGNISの国際的な人的交流は、大会を経るごとに深まるようである。知り合いも増えてきた。フィリピンに送ってくれたSIGNIS JAPANのメンバーに感謝したい。

（倉田夏樹 事務局チーム／東京教区信徒）

## ザビエル祭の一日

2025年11月24日（月・振替休日）に行われた日本カトリック神学院恒例のザビエル祭に今年は久しぶりに「SIGNIS JAPAN」として参加しました。神学院の入口を入ってすぐ先の場所に「SIGNIS JAPAN」の活動紹介ブースを開設、講義棟2階の音楽室を借りての特別映画上映会を実施させていただいたものです。

参加申請締め切り（9月30日）直前の定例会で「ぜひ参加しよう！」との声が上がり、映画チームの鈴木さんからも上映会のアイデアが示されたことを受け、神学院の実行委員長近藤真理生神学生（名古屋教区）に問い合わせると、参加申込をことのほか喜んでくれました。近年は神学院在籍者が減少し、ザビエル祭の企画・運営にも手一杯とのことで、とりわけ上映会企画の持ち込みも歓迎し、会場となる部屋についてもさまざまに思案してくれました。

紹介ブース（写真左）には多くの方が足をとめて、パソコンモニターにループ再生させた今年の映画賞受賞式の模様や各種紹介チラシ、とくに動画フェスティバルの作品募集チラシなども配れるだけ配りました。ホームページ上での告知が多い中、リアルにメンバーが顔を見せ、直接会い、ことばを交わすことの喜びを、メンバー自身が噛みしめていたと思います。反響がどれくらいあるかはわかりませんが、少しでも存在のアピールになっていたならば、と願うばかりです。

鈴木さん肝いりの上映会（写真右）の上映作品は、『我が道を往く』（1944年制作）。会場の音楽室に15席用意しましたが、満席になり、隣の部屋から2,3席分を補充したほどです。映画は、ニューヨークの下町の教会が舞台の、老司祭、若い司祭、教会界隈の人々をめぐるドラマ。音楽もちりばめられた映画で、神学院の院長でいらっしゃる稻川圭三神父にも縁のあった作品とのこと。観た方からは「今日は有難うございました。お陰様で大変良い映画の鑑賞をさせて頂きました。神学祭に相応しい内容でした～。心温まりました」との声も寄せられました。さまざまな企画・展示の中、足を運んでくれた皆さんには、こちらからも感謝しかありません。

小さくても何か人の中でアクションを起こすことは大事ですね。もっとも神学生自身に観ていただきたい映画でもありましたが、皆スタッフとして奮闘中。別個の企画として神学院での上映会ができたらとの希望も残りました。いずれにしても、未来の司祭の苗床である神学院との関係をこれからも大切にしたいと確信できた一日でした。（石井）



## OCIC から SIGNIS へ 50 年のあゆみに向けて（2）

前回は OCIC JAPAN の設立から SIGNIS JAPAN への名称変更の理由と日本カトリック映画賞や上映会についてのお話しでした。今回はアジアや世界のシグニスの仲間との連帯についてお話しします。

その時に忘れてはならないのは女子パウロ会の故 Sr. マリア・ヨセフ白井詔子（しらいしょうこ）の功績です。（写真次頁）Sr. 白井は 1978 年に女子パウロ会視聴覚部を開設し、1981 年のマザー・テレサの来日・日本への紹介に尽力しました。1989 年から 1995 年にかけては OCIC JAPAN の会長を務め、OCIC アジア会議に毎回出席し、アジアのリーダー的存在でした。OCIC WORLD の理事も務め、特に OCIC ASIA の多くの神父・修道者方と交流し、時には神父様方を叱咤激励しました。残念なことに、Sr. 白井はご病気で 2000 年に帰天され、その後日本の海外関係の活動は 2001 年の SIGNIS 発足の世界大会への参加ほかはありましたが、全般的に低調になりました。

2006 年春にアジア役員が来日し、日本でのアジア会議開催を強く要請され、対応できないと固辞したものの、故 Sr. 白井の念願だったとの話や、やれるのならやりたいとの思いが出てきて、最終的に翌年のアジア会議のホスト国を引き受け、2007 年 9 月に東京代々木のオリンピック記念青少年総合センターにてシグニスアジア東京会議が開催されました。この会議でのアジアの仲間との素晴らしい体験、刺激が SIGNIS JAPAN を活性化させました。以降のアジア会議、東アジア会議や世界大会には日本からできるだけ多くの人が出席し、アジアの活発な活動状況を肌で感じ刺激を受け、情報交換と同時に仲間づくりをしました。日本から発信する機会も増えました。日韓シグニス交流も実現しました。

また若い人をアジアの研修プログラムに送り出し、メディア技術の習得のほか、他のアジアのカトリック青年たちとの仲間づくりも推進しました。海外の映画祭に日本から審査員を出したこともあります。活動を活発化させる為、シグニス助成金（財布はバチカン）でいくつものプロジェクト（例、カトリック・ユース・インターネット・ラジオ（カトラジ）、Web マガジン AMOR ほか）を立ち上げて成果を出しています。



2016年8月 シグニス  
アジア・ラジオセミナー  
&ワークショップ  
(於インドネシア・ジョ  
グジャカルタ)

昨年9月にはシグニスアジア東京会議 2024 のホスト国をつとめました。（写真右下）17年前はアジア側に大変助けられましたが、今回はほぼ全面的に日本側で準備・運営しました。大変さを再認識しましたが、やはり日本で開催して良かった。改めてアジアの仲間との連帯を実感したし、今回は日本から多くの発信ができたのが嬉しかったです。50年の節目を通して自然な形での世代交代が達成できればとても嬉しいです。（町田）





左: 1982 マザー・テレサ 1 回目の来日、新幹線車内 (右が Sr.白井)

右: 映画『マザー・テレサとその世界 (千葉茂樹監督)』特別上映会  
聖パウロ女子修道会にて  
一番右が Sr.白井、左隣は小島好美氏  
(千葉監督夫人・映画製作)

## ～SIGNIS JAPAN 2025年振り返り～

### インターネットチーム

2025年前半は動画フェスティバルの授賞式の開催が最大の出来事でした。21もの応募作品があり、審査・授賞の流れができたことは恵み深いことでした。2年目に関しては苦闘しているところですが、進展を信じたいと思います。また「インターネットセミナー」という伝統のある取り組みが今年は映画メインのものでしたが、今後どのような企画にニーズがあるか、意識をいったん「0」に戻して探っていく2026年となりそうです。 (PIY)

今年の大きなトピックとしては、やはり前年から始まったシグニス動画フェスティバルが挙げられます。第1回受賞作品の選考から授賞式まで、シグニスメンバーはもちろん、外部のさまざまな方にご協力いただいたおかげで何とか終えることができました。第2回も現在進行形で進めていますが、イベント運営の難しさや大変さを実感しています。セミナーも含め、もっと多くの人と共有し、楽しめる方法を来年も模索していきたいと思います。

(高原)

八戸生活3年目、大きな地震が起きました。ご心配に感謝。中心街には被害もあったものの、幸い私は家も職場も教会も無事でしたが、教会役員としての仕事は増えるばかり。シグニスにはしばらく戻れそうにありません。

(石原)

### 映画チーム

今年もたくさんの素敵な作品に出会えたことに感謝しています。なかなか劇場に行かれなくても、オンラインやDVDで、チームで情報を共有しながら活動ができていることにも感謝でした。そんな私たちの今年心に残った作品を紹介いたします。

#### 今年の1本:『国宝』増田眞澄

友人たちが大騒ぎしていたので6月封切り早々映画館へ。圧巻の演技、美しい所作、ストーリーにも引き込まれ3時間が気にならないほど没入しました。まだまだ上映中。もう一度 大きな画面でじっくり観たいと思います。

#### 私の2本:鈴木浩

心に残ったのは『ふつうの子ども』と『秒速5センチメートル』。共に子ども時代の大切さを描いています。「昔出会った大切なモノは今も日常」「いつだって、世界は『好き』でまわっている」老いの胸を温かく包んでくれる作品でした。

#### 今年の1本:『女性の休日』大沼美智子

1975年10月24日、アイスランド全女性の90%が一斉に仕事、家事を休んだ。インターネットもスマホもない時代に、ジェンダー平等先進国になる大きな出来事。当事者たちの楽し気な証言に、私も勇気をもらいました。

### 事務局チーム

カトリック映画賞の授賞式&上映会、新しく始まった動画フェスティバル、神学校のザビエル祭への参加、などなど、今年も少ないメンバーで力を出し切って活動しました。不思議な集まりです。この熱心さがシグニスの売りでしょうか。 (清水)

私はプロテスチント教会であるルーテル教会の信徒ですが、今年は何と言っても「教皇選挙」が一番の大事件でした。お亡くなりになった今でもフランシスコ教皇を大事に思っていますし、次の教皇レオ14世に期待します。

(酒井)

所属教会が聖年巡礼教会となり、教会挙げて全面対応。多くのチームに分かれ準備・練習・本番。多くの巡礼団・巡礼者をお迎えしご接待。教会が動いている、聖霊が動いている、「共に歩む」を実感・感動・喜びの1年! (町田)

今年は動画フェスティバル、カトリック映画賞、秋のザビエル祭参加とイベントが続き、楽しくも慌ただしい日々でした。来年は50周年、馬のよう軽やかに走って新しい景色を見に行きたいと思います。 (泉)

今年もシグニスジャパンを応援していただき、心よりお礼申し上げます。来年は50周年、映画賞も第50回という節目の年を迎えます。シグニスの信条である、"平和の文化のためのメディア"を心に留め、希望の巡礼者として旅を続けたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

新しい年が平和でありますよう、お祈りいたします。

SIGNIS JAPAN 一同